







# **NOTICIAS DO BRASIL**

Diretor-Interino e Proprietario: SEISAKU KUROISHI

Fundado em 1917

Redacão, Administração e Oficina: Rua Caramurí, 63 – Caixa Postal, 3148 – São Paulo

N.º 2.821

ANO XXXII

SÃO PAULO, Sexta-feira 11 DE FEVEREIRO DE 1949

Circula às Segundas, Quartas e Sexta

その次の朝八時が湯ヶ野  
出立の鈴東だった。私は夫  
國漫の横で買つた鳥打鞆をカ  
冠り、高尋學校の側帽をカ  
バンの奥に押し込んでしま  
つて、街道沿ひの木質宿へ上  
行つた。二階の戸障子がす  
つかり明け放たれている  
バソの奥に押し込んでしま  
つて、何の気なしに上つて  
くと、藝人達はまだ床の中  
にいるのだった。私足も  
との寝床で、踊子が尻赤に  
なりながら兩の腰ではなと  
頭を抑えてしまつた、彼女は  
は中の娘と一つの床に寝て  
いた、昨夜の濃い化粧が残  
つていた、唇と毗の所が少  
しにじんでいた、この情緒  
的な寝姿が私の胸を染めた  
「昨晩はありがたうござ  
いました」、綺麗なお辞儀  
をして、立つたまゝの私を  
まごつかした  
男は上の娘と同じ床に寝  
ていた、それを見るまで私  
は、二人が夫婦であること  
をちつとも知らなかつたの  
だつた  
「大變すみませんですよ、  
今日立つつもりでしたけれ  
ど、今晚お座敷がありさう  
で御座いますから、私は逃  
れました、どうして今日お  
立ちになるなら、また下田  
でお目にかかりますわ、私  
達は甲州屋といふ宿屋にき  
めておりりますから、直ぐお  
分りになります」  
と、四十女が寝床に半ば起  
上つていつた、私は突つ放  
されたように感じた  
「明日にしていただけませ  
んか、おふろが一日延し  
つて承知しないもんですね  
らね、道連れのある方がよ  
ろしいですよ、明日一しよ  
に愈りませう」  
と男がいふと、四十女も  
つけ加えた  
「そうなるまじよ、折角  
お連れになつていただいて  
こんな我儘を申しあやすみ  
ませんけれど、明日は雨が  
降つても立ちます、明日後  
は旗で死んだ夜坊の四十九  
日でございましてね、四十  
九日にはばかりのことを  
下田でしてやりたいと前々  
からも思つて、その日までに  
下田へ行けるようになって  
いたのでございましょう、そ

立の踊子 (5)  
端康成

んなことを申しあが失禮で  
すけれど、不思議な御縁で  
すもの、明日はちよつと  
拜んでやつて下さいまし  
な」

そこで私は出立を延すこ  
とにして階下へ下りた。皆  
が起きて来るの待ちながら  
も、汚い帳帳で宿の者と  
話していると、男が散歩で  
誘つた、街道を兩へ少し行  
かつていたとのことだった。  
今でも時々大島の港で芝居  
をするのだまうだ、彼らの  
は身の上話を始めた、東京  
である新派役者の群に暫く  
加つていたことだつた。  
の濡干によりかゝつて、彼  
は衣類の風呂敷から刀の鞘が  
足のようになみ出でてしまつたが、お敷處でも芝居  
の真似をして見せるのだ  
といった、柳行李の中はそ  
の衣装や鍋文碗などの世帶  
道具なのである。

「私は身を誤つた果てに落  
ぶれてしまひました、兄が  
甲府で立派に家の後目を立  
てゝいてくれます、だから  
私はまあ要らない體なんで  
す」

「私はあなたが長岡温泉の  
人だとばかり思つていま  
したよ」

「そうでしたか、あの上の  
娘が女房ですよ、あなたよ  
り一つ下、十九でしてね、  
娘の空で二度目の子供を早  
速しちやつて子供は一週間  
ほどして息が絶えるし、女  
房はまだ体がしつかりしな  
いんです、あの婆さんは女  
房の實のおよろんなんです  
娘子は私の實の娘ですが」

「へえ、十四になる娘があ  
るつて云ふのはー」

「あいつですよ、妹だけは  
こんなことをさせたくない  
と思ひつめていますが、そ  
こにはまたいろんな事情があ  
りますね」

「それから白分が、榮吉、  
女房が千代子、妹が薰とい  
うことなどを教えてくれた  
もう一人の百合子といふ十  
七の娘だけが大島生れで服  
ひだとのことだつた、榮吉  
はひどく感傷的にうつて泣  
き出しきな顔をしながら  
河濱を見つめていた。

引返してくると、白粉を  
洗ひ落した娘子が路ばたに  
うづくまつて犬の頭を撫で  
ていた、私は自分の宿へ歸  
らうといった

創作寓  
一、博士と人造人間  
ある博士が苦心さんたんして一つの人造人間（以下ロボットと書く）を造りあげた。このロボットは手足の動かしかったから頭かたちをくべきものへ考へ方まで博士とそくりそのままであつた。  
博士は大層氣に入つて自分でしなければならない色々の煩らわしい仕事は全部成り代つて来客の應對をしたり手紙を書いたり植木鉢に水をやつした。誰ぞそれがロボットであると気がつくのはなかつた。  
こんな具合で幾週間か経つた。ある日のことロボットの室で何やら騒ぐらしい音がする。博士は不思議に思つて行つて見るとロボットは寝ぼけ一枚になつて一生懸命に一つの別なロボットを造つてゐた。  
「これ／＼どうしてそんな物を造るのかね」と博士が聞いた。  
「はあ、御承知の通り私の身体は何から今まで博士とつくりに出来てます」「それはそうさ、その通りだが、それで？」  
「それで實はこの頃博士に代つて色々な煩らわしい仕事を見えすいた嘘は吐かぬこと。  
と書いたら、彼奴おれにあつてつけてるな、と大たい人は思ひ當る。  
諷刺の妙味はこれを聽く萬人が萬人、皆自分のことをいはれたのだと思ひ當るところにあると、ウイスカだか誰だかと言つて、思ひ當る方に馴染がある。

は左様なら、御頬爛よう」  
三、雨蛙と蟬  
毎日も幾日も雨が降り続いた。芋の葉の上にちよこなんと坐りこんで天下の形勢を眺めてゐた雨蛙が、と近くの木の枝の蔭で雨を避けしがみついてる三四の蟬を見つけた。  
「やあ、蟬さんお氣の毒でねー」と雨蛙は話しかけた。  
「たー何んでもこれかわらは我々の天下ですよ。御覧なさい。あの空模様を。雲はちつとも動こうとはしないし、風は死んだように

文藝

押しなべて出水の樹の谷中  
し  
蚊張  
直しや  
枕蚊張置けご氣になる蚊の  
唸り  
羽蟻  
蚊をやきつ蚊張のみりなど  
めは  
合巣のさながらに似て羽蟻  
集る  
押し寄せる羽蟻の群や宵の  
窓  
油虫  
油虫煙んで席坐のよどめは  
り  
油虫すぐるが如き歩み哉  
日除け  
丹精に作る花壇の日除哉  
日除けして者の吾子に語た  
電力統制の聲ではびくとも  
とし、増税の聲では又びく  
りする。  
人さわがせな聲は立てられ  
がよろし、立てよから、お  
わてゝ口を塞ぐなどは、ふ  
つともない。  
併し、その度毎にびつく  
りする方も、見つともなく  
ないではない。

アント・イラセーマー  
第一回 夏木立、胡蝶  
四点句  
朝顔の露を拂  
街木立今日も  
用晴れて育葉  
大道に添ふ夏  
木立白い山  
巖山河越えてト  
サボテンの暮  
朝顔の垣を廻る  
鳴りの虫ある  
夏木立白い山  
巖山河越えてト  
サボテンを遠望  
自転車を止め緑の蔭選ば  
緑なす木々の蔭さす山哉  
蛇 白石俊水  
永き日や魚賣人の高計り  
ファゼンダのカマラダ蛇に  
油賣り 何的にまかり處でしや庭の  
蛇 金子一  
放つ眼に憂ひ解け行く春の  
山 大店に射る陽さびしき残局  
かな 石壇に射顯る夕陽の墨かた  
風に搖れ毎は宵し日は暮る  
其の中に調度の品の廢椅か  
哉 貨車一ツ引込線に陽炎へ  
氣經さや西日来る家の路室  
の奥 齒科院の愁にさかりして  
ガ哉 今よひは君と別れる日  
體言葉の一言は  
我が身に餘るまごころよ  
「おゝ我が友よ幸あれ」  
あゝ陽は西に沈み行く  
空には三日月唯一人  
何時かのよひの影淡く  
昔の青春よさようなら  
いとしき君よ別れ行く  
遠くの空へ立ちて  
温める心のやるせなさ  
いとしき君よさようなら  
朝 風  
夢の影、過去の影

ルベニアス  
ザ・ダス  
商品目録付  
不拘制用の機械  
用品一切其の他  
トベラの材料  
の最も完璧せる病院  
市カントナレッフ街九二八  
電話四一〇五三二  
・ローレス病院  
看護婦居ります  
卒業  
有する日本人産婆も居ります  
ーナ市  
、婦人科、耳鼻、咽喉科  
科、X光線、電気治療  
ビエル・ド・トレード街一九四  
電話四一九  
の福音  
タント・アンドレ市  
サント・アンドレ市  
有  
蒸氣釜及蒸氣アイロンを御販賣  
特許者號三九七三五  
一號  
三六三八八一七九四四八  
・龍虎博の卷)  
形月  
龍之助子駒原  
忘不林…作原…助演熱…子駒原  
ノキマ…督監  
博正  
主催  
島興業會社提供  
善事業後援會  
所に移す  
プラット街三〇番三階四号室  
百三十五番(カーデ前回)